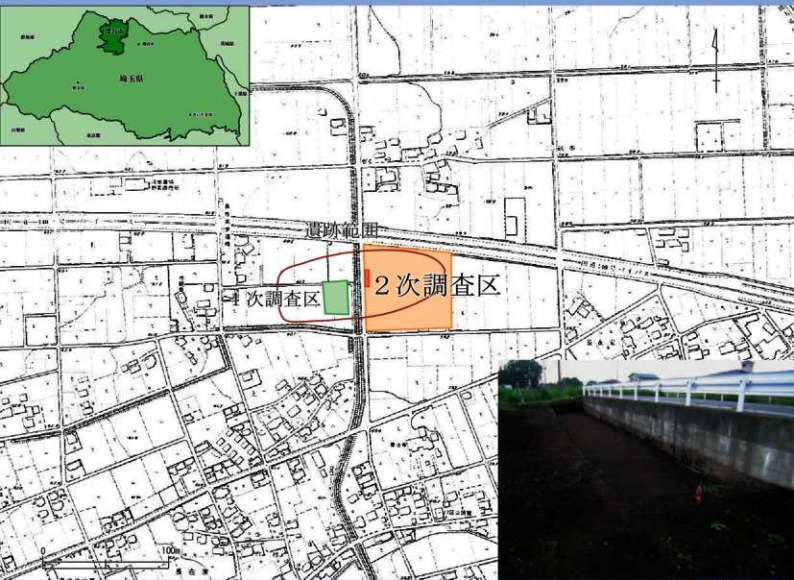


埼玉県深谷市

ながざいけかみ

長在家上遺跡 (第2次)



調査区 (北から)

深谷市教育委員会

2006

例 言

- 1.本書は、埼玉県深谷市長在家1800番地他に所在する長在家上遺跡第2次調査の本報告書である。
- 2.発掘調査は、平成18年6月8日に実施し、整理報告書刊行は引き続き行い、平成18年7月31日に報告書を刊行した。
- 3.本遺跡のXY座標は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づき、方位は全て座標北を示す。断面図の標高値は海拔高度を示す。
- 4.発掘担当者・本書の作成は村松篤が行った。なお、発掘調査から整理作業の測量・遺物実測については、技研測量設計株式会社に委託し、前田和昭の補助を受けた。
- 5.出土遺物の保管と詳細なデータは、川本出土文化財管理センターで保管する。

1. 調査に至る経緯

平成18年2月20日付けで、深谷市長在家1800番地他の大型商業店舗建設にかかわる埋蔵文化財の所在について、株式会社ベイシアより照会された。そこで、市教育委員会は、開発区域には埋蔵文化財包蔵地(67-183、長在家上遺跡)があり、開発に先駆けて発掘調査が必要であると回答した。試掘調査は平成18年4月19日～22日にかけて、対象面積42,431㎡の内、遺跡の所在が予測される10,000㎡を対象として480㎡を調査した。試掘トレンチは20m間隔で設定して、重機で表土を掘削して人力で遺構確認面を精査した。その結果、予定地内の北西約800㎡において1次調査区で確認された縄文時代中期の集落の広がりと考えられる遺物包含層が確認された。試掘調査の結果を踏まえて株式会社ベイシアと協議をしたところ、遺跡の広がり内の750㎡については駐車場とするため盛土によって保護し、最も東側の道路用地50㎡については発掘調査を実施することとした。平成18年4月28日付で文化財保護法93条に基づく届出がされ、教生文第3-166号平成18年6月7日で通知された。本調査は、深谷市教育委員会が株式会社ベイシアから委託を受けて発掘調査を実施した。



1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



5トレンチ



6トレンチ



7トレンチ



8トレンチ



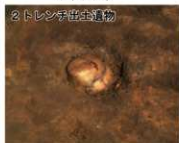
9トレンチ



10トレンチ



11トレンチ



2. 遺跡の位置

深谷市長在家は、深谷市南部の川本地域に位置する。本遺跡は標高60m付近の櫛挽台地上に位置し、東に向かいならかに傾斜する微高地縁辺に立地し、試掘調査の結果を見ると東西方向の埋没谷に挟まれた微高地を中心に、縄文時代中期を中心とする遺跡が立地している。道路を挟んで西側に位置する1次調査区からは、遺物集中箇所3箇所、埋壺1箇所、溝1条が確認され、縄文時代前期から後期にかけての土器・石器が出土している。

3. 遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代中期を中心とする遺物包含層である。遺物の分布は埋没谷に挟まれた東西方向に長い約10m幅の微高地上から検出され、土器108点、石器6点、礫21点の合計135点の遺物が出土している。ここでは試掘調査区から出土した遺物もあわせて、記述をおこなう。

1～8は縄文時代前期諸磯a式土器で小破片が多い。1～6は橙褐色を呈し、地文はRLの縄文である。1・2は口縁部で内削り状となり外反する。3は半截竹管による連続刺突文が施文され、6は半截竹管による押し引き文が施される。7・8は同一個体で、7は竹管の押し引き文が巡らされる。9～30は中期加曾利E式土器である。9は大型のキャリパー形深鉢の口縁部で隆帯による渦巻き文が配される。10は波状口縁の突起部分で突起上端に渦巻き文が配される。11は口縁下に幅広の沈線による区画が配される。12は口縁が内湾し、口縁下に幅広の沈線が巡る。13は口縁下に沈線による逆U字状の磨り消し帯が配される。14は波状口縁下に円形刺突を有する隆帯がめぐる。15は弧線土器で口縁下には交互刺突文を巡らせる。16は懸垂沈線間に縄文を施す。17は二条の隆帯が懸垂し、18は磨消縄文が垂下する。19は胴部上半が1/5残存する深鉢で口縁部は直線的に立ち上がる。口縁下から縄文施文され、逆U字状に三条の沈線が配される。20は内湾する口縁下に縄文が施され、21は口縁下に沈線が巡らされる。22～26は口縁下に沈線により区画された無文帯を残し以下縦方向の櫛書き文を施すものである。26は厚みのある口縁部で内湾して立ち上がる。27は沈線区画の磨り消し帯が垂下するもので、胴部中位の1/5が残存する。28は底部よりの破片で櫛書きが施される。29・30は底部が完存するもので、29は胴部には三条単位の沈線区画の磨り消し帯が垂下する。31は近世のカワラケの口縁部破片である。

32～36は打製石斧である。36が撥形を呈する他は、胴部中位に挟り込みを有する分銅型を呈する。調整加工は全体的に粗い。32～35がホルンフェルス、36が砂岩である。37は敲石であるが敲打痕は不明瞭である。38は閃緑岩の凹石で、片面に2個の凹穴がある。素材の礫は不整形であり特に加工等は認められない。

4. まとめ

長在家上遺跡の2次調査では、1次調査で発見された縄文時代中期の包含層の広がり確認され、遺跡東側の限界を確定することができた。また、縄文時代前期の遺物の存在は、櫛挽台地の遺跡では、諸磯期と中期加曾利E期の集落が、断続的に形成されることが再確認できた。櫛挽台地上には、沢口・亥ノ堀遺跡などのように旧の流路や湧水地に沿って遺跡が列状に点在しているものと推定される。

長在家上遺跡全体図 (S : 1/500)



遺物出土状態



完掘状況

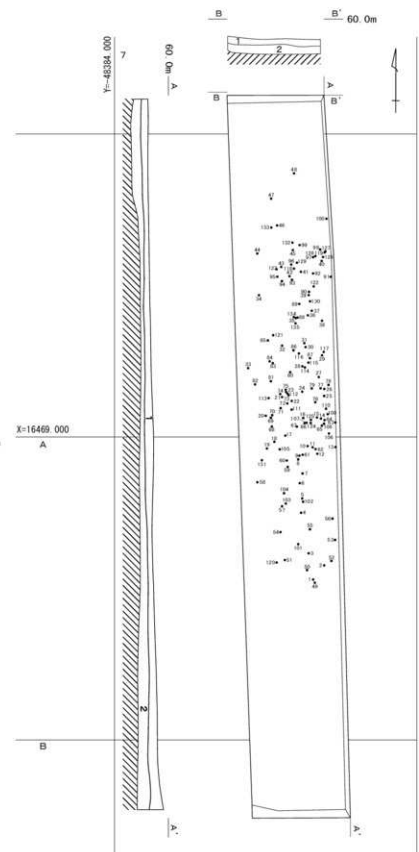


土層



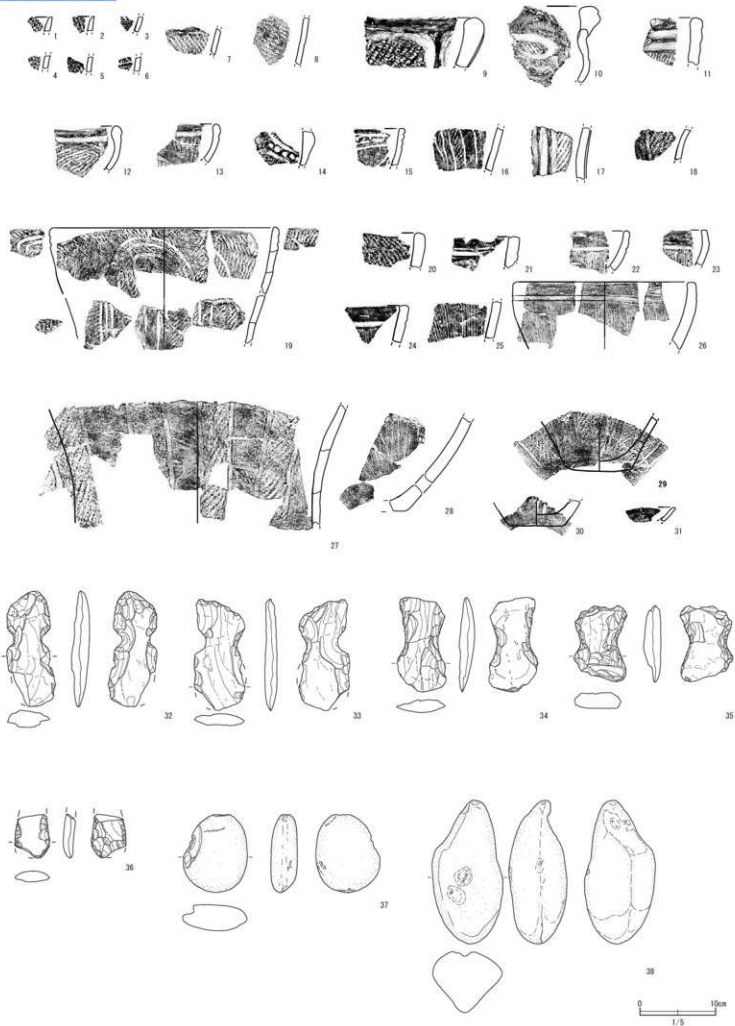
調査風景

2次調査全体図 (S : 1/100)

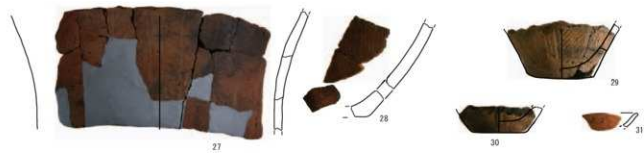
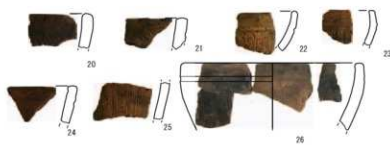


- 1層 表土層 しまりなくボソボソする
- 2層 灰褐色土 径1~2mm次のローム粒炭化粒を含む
下部は明るい褐色の層移層 しまり粘性あり

● 孔
● 土層
● 石層・石製品



出土遺物写真



長在家上遺跡 2次調査出土遺物観察表

No.	遺物時代	遺物類別	出土位置	遺存状況	説明	色調	焼成	胎土・石質
01	縄文	縄織a式	包含層	口縁部	口縁部は内附り状に外反、RLの縄文を施文	褐色色	良	微砂粒を含む
02	縄文	縄織a式	包含層	口縁部	口縁部は内附り状に外反、RLの縄文を施文	褐色色	良	微砂粒を含む
03	縄文	縄織a式	包含層	胴部	手籠竹による連続押引きを施す。地文はRLの縄文	褐色色	良	微砂粒を含む
04	縄文	縄織a式	包含層	胴部	RLの縄文を施文	褐色色	良	微砂粒を含む
05	縄文	縄織a式	包含層	胴部	RLの縄文を施文	褐色色	良	微砂粒を含む
06	縄文	縄織a式	包含層	胴部	手籠竹による上縁が施される。地文はRLの縄文	褐色色	良	微砂粒を含む
07	縄文	縄織a式	試掘11cm	胴部	胴部に竹管による押し引き縁線が施る。地文はRLの縄文で横方向に施文	褐色色	良	砂粒を含む
08	縄文	縄織a式	試掘11cm	胴部	地文はRLの縄文で横方向に施文	褐色色	良	砂粒を含む
09	縄文	加曾利E式	包含層	口縁部	大型のケリハ型深鉢。地文はRLの縄文、断面三角形の幅広い帯帯で渦巻文を施す	淡褐色～茶褐色	良	砂粒を含む
10	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	突起部分で、突起上縁に渦巻文を施す。幅広い上縁により横円文が施される	褐色	不良	大粒の砂粒を含む
11	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	口唇部に太い二条の沈線が走り、縄文を施す	黒褐色～茶色	良	輝石砂粒を含む
12	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	内湾して立ち上がり、口縁下に幅広い沈線が走り、LRの縄文を施す	茶褐色	良	砂粒を含む
13	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	内湾して立ち上がり、胴部上半に逆U字状の磨り消し帯が配される。地文はRLの縄文	褐色	良	砂粒を含む
14	縄文	加曾利E式	包含層	胴部	波状の口縁下を逆巻帯上に連続した円形突起を施す。地文はRLの縄文	茶褐色	良	輝石砂粒を含む
15	縄文	加曾利E式	包含層	口縁部	口縁下に円形工具による交互刻文を施し胴部には弧線文を配す。地文は黒赤文	黒褐色～茶色	良	石灰砂粒を含む
16	縄文	加曾利E式	包含層	胴部	地文はRLの縄文、縦方向に沈線を垂下させる	褐色～黒褐色	良	石灰砂粒を含む
17	縄文	加曾利E式	試掘11cm	胴部	地文はRLの縄文で二条の帯帯を垂下	褐色	良	輝石砂粒を含む
18	縄文	加曾利E式	包含層	胴部	地文はRLの縄文、幅広い沈線区画と磨り消し縄文帯が垂下する	茶褐色～黒褐色	良	輝石砂粒を含む
19	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	1/5程度の深く深鉢。逆U字状に三条の沈線を施す。口縁下からRLの縄文	赤褐色	良	砂粒を含む
20	縄文	加曾利E式	包含層	口縁部	内湾する口縁下からRLの縄文を施文	茶褐色～赤褐色	良	輝石砂粒を含む
21	縄文	加曾利E式	包含層	口縁部	口唇部下に幅広い沈線が施る	淡褐色～茶褐色	良	輝石砂粒を含む
22	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	内湾する無文の口縁部下に沈線が走り、以下磨擦文を施す	明褐色	良	砂粒を含む
23	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	内湾する無文の口縁部下に沈線が走り、以下磨擦文を施す	褐色	良	砂粒を含む
24	縄文	加曾利E式	包含層	口縁部	直線的に立ち上がる口縁部下に沈線が走り、以下磨擦文を施す	赤褐色	良	輝石砂粒を含む
25	縄文	加曾利E式	包含層	胴部	縦方向の磨擦文	茶褐色	良	輝石砂粒を含む
26	縄文	加曾利E式	試掘11cm	口縁部	内湾する無文の口縁部下に沈線が走り、以下磨擦文を施す	黒褐色	良	輝石微砂粒を含む
27	縄文	加曾利E式	試掘11cm	胴部1/5	太い沈線に区画された磨文帯が縦方向に垂下する。地文はRLの縄文	褐色	良	石灰砂粒を含む
28	縄文	加曾利E式	試掘11cm	底部	縦方向に磨い磨擦文を施す	赤褐色	良	輝石砂粒を含む
29	縄文	加曾利E式	試掘11cm	底部完存	RLの縄文を施文とし、三条単位の沈線による磨り消し帯が垂下する。底径8.5cm	褐色	良	輝石砂粒を含む
30	縄文	加曾利E式	試掘11cm	底部完存	平底 底径7.0cm	褐色	良	輝石砂粒を含む
31	近世	カワラケ	包含層	口縁部1/6	口縁部外反する	灰白色	良	小粒、微砂粒を含む
32	縄文	打製石斧	包含層	一部欠損	分銅形で調整は粗い。15.3×6.0×2.2cm、20g	灰褐色	—	ホルンフェルス
33	縄文	打製石斧	包含層	一部欠損	分銅形で調整は粗い。14.7×6.7×1.6cm、186g	灰褐色	—	ホルンフェルス
34	縄文	打製石斧	包含層	完存	分銅形で調整は粗い。12.5×6.4×2.2cm、167g	灰褐色	—	ホルンフェルス
35	縄文	打製石斧	試掘11cm	完存	分銅形で刃部を再生する。10.0×6.9×2.3cm、191g	灰褐色	—	ホルンフェルス
36	縄文	打製石斧	包含層	刃部残存	楕形。5.7×4.5×1.4cm、44g	灰白色	—	砂粒
37	縄文	磨石	包含層	一部欠損	円縁の両側に磨打痕を残す。10.3×8.5×3.5cm、417g	灰褐色	—	閃緑岩
38	縄文	凹石	包含層	完存	加工痕のない自然磨の表面に2ヶ所に凹みを持つ。19.0×9.4×7.6cm、1501g	灰褐色	—	閃緑岩

報告書抄録

フリガナ	ナガザイケカミ						
書名	長在家上遺跡（第2次）						
副書名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書					巻次	78
シリーズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者	村松 篤						
編集機関	深谷市教育委員会						
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本町17-3			In	048-572-9581	Fax	048-574-5861
発行日	2006年7月31日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長在家上遺跡	深谷市長在家	11406183	36° 8' 50	139° 17' 44	2006.6, 8	50㎡	大規模商業施設建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
長在家上遺跡	集落	縄文	包含層	縄文土器（諸磯、加曾利E）、石器（打製石斧、凹石、磨石）、カワラケ（近世）			縄文時代集落の広がりを見える
	概要	長在家上遺跡は掘換地南部に位置する縄文時代を主体とする集落跡である。今回の調査により、東西方向の埋没谷により残された微高地上に点在する包含層の存在が明確となった。また遺跡の東側の広がり限界を抑えることができた。					

長在家上遺跡（第2次）

平成18年7月31日

編集発行 深谷市教育委員会

印刷 たつみ印刷（株）